

北前船・和算などをめぐって*

Revolve a north front ship, mathematics developed in Japan, etc.

梶川 雄二**
Yuji KAJIKAWA

概要

江戸時代後期から明治初めにかけて、物資・文化の伝搬は日本海側の方が盛んであり、北前船がその一翼を担っていた。ここでは、北陸・東北・北日本海側地方、兵庫県但馬地方、津和野また瀬戸内などの地方での北前船と和算について述べる。

1. 北前船のこと

江戸時代後期から明治初めにかけて、物資・文化の伝搬は日本海側の方が盛んであり、北前船がその一翼を担っていた[1]。



京都・大阪の米を瀬戸内・下関から日本海に出て、山陰・北陸・東北日本海側を經由して当時「この5月は江戸にもない」との表現でも有名な北海道南西部の町江差にまで行っていたことはよく知られている[2]。

当時北海道では米が育たず米を堂島から持ち込み、帰りは江差のにしん、昆布を運んでいたようである。現在も大阪では、アイヌの娘の絵で有名な「えびすめ」などの昆布のお店が多々存在し、京都のにしんそばも有名である。

私は逆にそばが持ち込まれた江差で、にしんそばを横山家で賞味したことが何回かあるのである。文政13年版 千葉雄七胤秀の算法新書も有名である。

有名な江差の民謡「江差追分け」はこのような北前船による人的交流から生まれたようで、座頭の人がもたら

したと言われている。

また、和算もこの交流をもとにしてもたらされたようで、江差の横山家には「算法新書」が蔵に眠っており、もう一軒の古い家、にしん御殿で知られる関川家には「継子立て(ままこだて)」に関する興味ある書物がいくつか残存している。

また、幕末の「函館戦争」(1868-1869年)の折りに軍艦船開揚丸が江差沖で座礁しており、海中から関流の和算の本が多くあがってきている。

当時断片しかなかったものを襖に張り付けて乾かす根気のいる作業で復元したものである。

まさに江差は当時(江戸末期、明治初頭)としては、現在の札幌を凌ぐ北方文化の一大中心地だったと言えるのである。

2. 北陸・東北・北部日本海側地方のこと

新潟県長岡市および山形県鶴岡市も多くの北前船の立ち寄った所で、ここにも多数の和算の算額が今なお新しく発見されている。

その写真を添えておく。



* 原稿受理 平成25年1月10日

** 一般科目

鶴岡市の社寺は奈良、京都と共通な名を持った所が多数存在し、我々が立ち寄った所も春日神社という名を持っている。

北陸の能登半島にも多くの北前船が寄港し、2つの総持寺も能登の門前と関東の神奈川に共通な名前を持っている。

3. 兵庫県但馬地方について

境港から北前船の航路を北にたどると、鳥取県内は砂浜が多く、良港に恵まれないという不利な地域性があり、次に入港できるのは兵庫県北部ということになる。

特に香住・浜坂・竹野は北前船の船頭にとって待ち遠しい風待ち港だったのではないだろうか。

その竹野に北前館があり、種々の資料が展示してあり、解説書を買って求める事も可能である。北海道南西部と畿内との関係もよく引き合いにだされるが、宗谷地方と山陰東海岸との関連も、すなわち開拓民として移住し、この時代に培われたものと推測される。

たとえば利尻島の民俗博物館には香住鶴の酒びんが展示してあるし、鳥取の麒麟獅子舞もこの地に伝承されている。現に利尻島の一地区はすべて鳥取からの移住者が祖先である。

4. 大阪市立海洋博物館において

大阪市立海洋博物館は地下鉄コスモスクエア駅の近くに存在する。

ここは実寸大の北前船が復元展示してあり、初めて見る人はその大きさに圧倒されるであろう。

航海の様子を体験できるコーナーもあり、すばらしいの一言につきる。

ただここも訪れる人が少なく（近くのテーマパークや水族館の客をとられているからであろうが）、間もなく閉鎖になるのが残念である。

次に山陰地区は一説にあまり北前船に貢献していないといわれるのだが、江戸側の太平洋航路に貢献した人物について述べたい。

また前述の大阪市立海洋博物館の大きな船は、実際にはこちらの航路に用いられたのかもしれない。

5. 堀田仁助について

江戸末期に現在の広島県廿日市市に生を受け、成人して津和野藩士となった。

和算に長けた師の影響を受けて、天文学・地理学についてもその影響で蝦夷地（現在の北海道）の測量・地図作成を命じられた。

また、実際に太平洋側の航路を辿り、北海道に渡り、日高地方平取の義経神社にも算額を奉納したとの記録がある[3]。

また、現在の島根県津和野町の大コ谷稲成の宝物館に彼の作成した地球儀・天球儀が納められている。

また、晩年津和野に帰り、藩校である養老館にて和算の講義をうけもち若い藩士などに多大の影響を及ぼしたことが知られている。



6. 観光地としての津和野と学術研究および地域の文化伝承の地としての津和野

ドイツの中世都市ローテンブルグ等と同じく、津和野も観光地と文化伝承という難しい問題を両立させなければならぬ。

津和野藩から出た逸材は確かに多く、またそれ故に町全体が研究者の対象となることも事実である。

ところがそれだけでは生活できないという現実がある。私たちがその生活できない方に偏っている方なので、小さな民宿を利用した。

しかしその食事があまりにすばらしく津和野的で、味付けも京都風であった。

同行の母とも話していたのであるが、この素晴らしい民宿群を活用して分宿させたら修学旅行も可能なのではないか、山陰の方々はあまりに自分たちの持っている財宝に目を向けなさすぎるのではないかとこのことであった。

私たちが投宿した夜に神楽の佐ぶみ社中の実演があり、見事な「八又のおろち」の舞が公演された。

私はドイツのドレスデンで見た楽劇「ジークフリート」を思い出していた。その中でもジークフリートが大蛇を退治する場面が特に有名である。

7. 瀬戸内の北前船

多島海である瀬戸内海は自然の力を借りての航行であった北前船にとって比較的楽な航海であったことが想像

できる。

特にしまなみ海道に属する島々では、遊郭の存在も確認されており、今日も多数の風待ち港の存在も確認されている。

後に島根県の津和野藩士となる堀田仁助はこのような環境の下、現在の広島県廿日市市付近で生を受けている。藩校の分院はもはや廿日市市には残っていないようであるが、後の蝦夷地の探検の折にその非凡な才能が認められ、幕府の職についていた事から、新たに開発された太平洋側を通して現在の東北、北海道に達したのではないかと想像できる。

8. 平取における義経神社

新千歳空港から苫小牧へ出てバスを乗り換えて一日一本しかない苫小牧、平取、日高便で平取へは行くことができる。

しかしながらアイヌの人の遺跡が多数存在する仁風谷へ行くには、さらにバスを乗り継いで行く必要がある。義経神社は比較的市街地に近い所にあるが、それでもかなりの道のりを歩くか、仁風谷へ向かうバスで途中下車するしかアクセスはない。義経神社には堀田仁助の奉納した算額が存在するはず(続神壁算法による)であるが、現在の義経神社はいろいろな経路を経てここへ移ってきているので、はたしてここがその社であるのかどうかははっきり言って確かではない。

興味のある方は「続日冠町志」をご覧ください。



9. 北陸の事情について

現在の JR 福井駅から越前鉄道の三国港へ行く線に乗って芦原湯の町駅で降りてから、タクシーを利用して龍翔館へ行くことができる。

ここにも大きな北前船の模型があり、三国港が風待ち港として発展してきた様子が資料によって確認できる。北陸沿岸にはこうした風待ち港が多数存在するが、現在でも冬はなかなか北陸を訪れるのが難しいように、当時はおそらく冬は航行せず春を待ったのであろうと推測される。

龍翔館は学校としても機能したようで、三国の経済、文化についての種々の資料が得られる。ただ、残念な事に、和算についての資料はあまり見つからなかった。

学校(寺小屋)では当然算術も教えていたはずなので、ここも再度訪れて調査する必要があると考えられる。

参考文献

- [1] 北前船おっかけ旅日記無明舎鑑啓記著
- [2] 北前船加藤貞二著 無明舎
- [3] 続神壁算法